

なぜ聞き手を指す「そのN」は 非丁寧になるのか

金井勇人

◆要旨

本稿は、なぜ聞き手を指す「そのN」は非丁寧になるのか、という問題を考察する。例えば、「先生、質問があるのですが…」において、「先生」は非丁寧ではない。ところが「その先生、質問があるのですが…」のように「そのN」という形式で指すと、非丁寧になる。

この現象を説明するにあたり、本稿では、この「そのN」におけるソは、人称区分型における聞き手用法でも、距離区分型における中距離用法でもなく、両用法の性質を合わせ持つ、ということを論じる。

「そのN」による指示は、聞き手を認識しながらも、聞き手の領域の成立を承認しない（中距離の領域として捉える）という特殊なものである。このことがコソの非対称性を生み出し、聞き手を指す「そのN」は非丁寧になるのだと考えられる。

◆キーワード

ソ系の指示語、対話の開始時、非丁寧さ、聞き手用法、中距離用法

◆ABSTRACT

This paper examines the reason why “*Soko no noun*” is impolite when referring to a hearer. For example, “*Sensei, Shitsumon ga Aru no desuga...*” is not impolite. On the other hand, “*Soko no Sensei, Shitsumon ga Aru no desuga...*” is impolite. This paper argues that “*So*” in “*Soko no noun*” refers neither to the domain of a hearer in the person-division type nor to the domain of a medial range in the distance-division type. Not so, this “*So*” has properties of both uses. Referring to someone using the “*Soko no noun*” form is special as it treats the domain of a hearer as the domain of a medial range, that is, the speaker recognizes the existence of the hearer but does not approve of the hearer’s domain. This gives rise to a non-symmetry of “*Ko*” and “*So*,” which is thought to be the reason why “*Soko no noun*” is impolite when referring to a hearer.

◆KEYWORDS

demonstratives of *so*-series, at the start of a dialogue, impoliteness, reference to the domain of a hearer, reference to the domain of a medial range

Why is “*Soko no noun*” Impolite When Referring to a Hearer?

HAYATO KANAI

1 はじめに

本稿は、対話の開始時に“呼びかけ”として発話される「そのN」について考察する。^[注1]

- (1) 栄二は「こいつは案外お人好しだな」と思いながら、彼の見ている前で仰向けに倒れ、両手を頭のうしろで組んで、あけっぴろげに大欠伸をした。

「おい、その若ぞう」と松田はずんぐりした太い指で、栄二を突き刺すように指さした。(さぶ)

- (2) 「さあよく見ておくれ。このピースには裏に窓がある。こっちには窓がない。こっちのものっぺらぼう。さてこれがひょいひょいひょいこうなって、ひょいひょいひょい。さあ、どっちだ。…おい、そのおじさんよ。あんた、今朝の八時からずうっと眺めているばかりじゃないか。…」(下駄の上の卵)

- (3) 「だって、井筒さんが、どうしてもいやだとおっしゃるんなら、はたからいくらいってもダメなんでしょう」

「そうだよ。おい、その立派で、おめでたい課長さん、おわかりかね」井筒は、したり顔でいった。(停年退職)

(1)(2)(3) の話し手は「そのN」によって「若ぞう」「おじさん」「課長さん」を指している。本稿では、このような対話の開始時において自身が指されることを予測できない立場にある聞き手、およびその聞き手を指す「そのN」について考察する。

それは、そのような“呼びかけ”に、ソ系の指示語が含まれることの意味を、問題にしたいからである。

まず注目するのは、(1)(2)(3) において「そのN」を先行させることは必須ではない、という事実である。^[注2]

- (1)'「おい、若ぞう」と松田はずんぐりした太い指で、栄二を…
 (2)'「おい、おじさんよ。あんた、今朝の八時からずうっと…」
 (3)'「おい、立派で、おめでたい課長さん、おわかりかね」

上記のように「そのの」が先行していなくても、特に「おい」「ねえ」「ちょっと」などによって注意を引いておけば、「若ぞう」「おじさん」「課長さん」だけで、聞き手を指すには十分である。

それにもかかわらず、なぜ「そのの」が先行するのか。「そのの」の先行は、どのような表現効果を生むのか。本稿では非丁寧さという観点から、この現象を考察していく。

2 人称区分型・距離区分型

「N」が聞き手ではない場合に限ってみると、「そのの」が「N」に先行するのは、「N」だけでは対象を特定することが難しいので、場所的な手がかり（以下；位置情報）を提示するため、と考えられる。

「N」だけでは対象を特定するのが難しいというのは、例えば、指示行為が行われる現場が広い場合や、該当する可能性がある「N」が複数存在する場合などがあるだろう。

そのようなときに「そのの」を先行させて、位置情報を提示することによって、対象の特定を容易にさせるわけである。

それでは「そのの」は、どのような位置情報を提示するのだろうか。ソ系の指示語（現場指示）には「聞き手用法」と「中距離用法」という2つの用法がある。「そのの」が提示する位置情報は、言うまでもなくこの2つの用法と密接な関連を持っている。

そこでまず、三上（1955）、正保（1981）、金水（1999）、庵（2001）などを参考に、現場指示の典型的な場面である人称区分型（＝対立型）・距離区分型（＝融合型）を概観したい。

2.1 人称区分型

人称区分型は、一般に「対立型」と呼ばれる型と同義である。

- (4) 相手と話し手との原始的な対立の様式が楕円的である。両者は楕円の二つの焦点に立ち、楕円を折半してめいめいの領分として向い合っている。
(三上 1955: 177) ^[注3]

本稿では、話し手と領域を区分する「相手」を、「聞き手」と捉える。したがって、話し手の領域がコ、聞き手の領域がソというように、現場の領域が人称によって区分される。

- (5) 一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、… (中略) …三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そこのその突起を壊さないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おっと、もう少し遠くから…」
(銀河鉄道の夜)

- (6) (太郎と花子は並んで座っている。花子を持つ箱を指して)

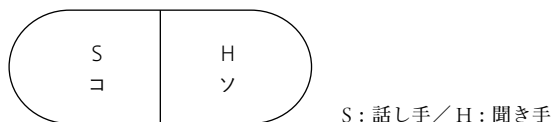
太郎「花子ちゃん、それ、何？」

花子「ああ、これは次郎君へのプレゼントよ」
(作例)

(5)(6) では、話し手である「学者らしい人」「太郎」が、「助手らしい人たち」「花子」を聞き手と認識し、その聞き手の領域をソ系の指示語で指している。これを「聞き手用法」と呼ぶことにする。

以上から、人称区分型は次のように図示される。

図1 人称区分型



このとき、ソ系の指示語は、対象が聞き手の領域にあることを表す。

2.2 距離区分型

距離区分型は、一般に「融合型」と言われる型と**ほぼ**同義である。

- (7) 相手と話手とは「我々」としてぐるになり、楕円は円になる。相手自身は消えることはないが、「ソレ」の領分は没収されてしまう。円内がコレ的で円外がアレ的である。(三上 1955: 178)

しかし正保 (1981) では、この融合型でもソ系の指示語が現れるとする。

- (8) 「例えば、タクシーに乗った客が運転手に、「そこのレンガ色の建物」の前で止めてくれ」というような場合、タクシーの運転手とタクシーに乗った客は融合型の状況にあると考えられる」

(正保 1981: 69、下線は引用者による)

融合型では、コで指すには遠く、かつ、アで指すには近い領域は、ソで指される。そこで、(7) の定義に (8) の修正を施すと、話し手と聞き手の領域から近い順にコ (近距離)、ソ (中距離)、ア (遠距離) で指す、ということになる。^[注4]

- (9) 「あんた、今そこの道を入ってくる時に雑貨屋があったろ。あれが以前文房具屋でね…」(エディプスの恋人)

- (10) 客「すみません、それ、見せてもらえますか」
店員「ああ、その黒い洋服ですね」(作例)

(9)(10) では「道」「黒い洋服」を、コで指すには遠く、アで指すには近い、ソの領域にあるものと捉えている。このように、融合型では、ソ系の指示語が中距離の領域を指す。これを「中距離用法」と呼ぶことにする。ただし、コ系やア系を使用するにあたっては、相手の存在は必須ではない。^[注5]

- (11) 昔の人は鏡に映った姿を見て「これは何だろう」といふかり、映像を
みつめたに違いない… (毎日新聞 1999.01.30 朝刊)
- (12) (電車内で、向かい側の座席に置いてある箱を指して)
「?それは何だろう。誰かの忘れ物かな」 (作例)
- (13) (あの山は、この札幌の町が、うっそうたる原始林であった時から、
あの形のままだそこにあったのだろう) (塩狩峠)

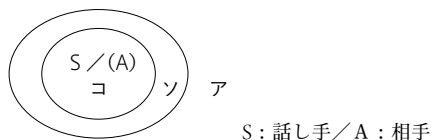
(8)～(13)の場面の特徴は、話し手が直示の中心で、そこから近い順にコ、ソ、アで指す、ということにある。

(12)に見るように、ソ系の指示語のみ、相手がいないと座りが悪い。しかし、(12)において相手がいる（その場合は座りが良くなる）としても、話し手が直示の中心であることに変わりはない。

したがって、相手の存在を前提とする「融合型」より、話し手が直示の中心であることだけを基準とする「距離区分型」の方が、(11)のコ系や(13)のア系も説明でき、より適切である。^{〔注6〕}

以上から、距離区分型は次のように図示される。

図2 距離区分型



このとき、ソ系の指示語は、対象が中距離の領域にあることを表す。

3 聞き手を指す「そのN」が成立する場面

以上、現場指示の典型的な場面である人称区分型・距離区分型を概観した。ソ系の指示語は、人称区分型では聞き手の領域を、距離区分型では中距離の領域を指す。^{〔注7〕}

以下、あらためて(1)(2)(3)を問題にするが、これらの特徴は「N」が聞

き手である、ということにある。そして、このような場面は、完全な人称区分型でも、完全な距離区分型でもなく、両者の性質を合わせ持つということを論じる。

3.1 「聞き手」について

まず (1)(2)(3) の「若ぞう」「おじさん」「課長さん」は、発話の直前、話し手の想定内において“聞き手”として認識されている。

話し手の発話において、ある指示対象を聞き手と認識するか否かは、基本的に話し手の主観に依存する。

つまり対話の開始時、話し手と指示対象が何ら関係を持っていなくても、呼びかけの直後、その指示対象から応答がある（あり得る）ことは確実である。そのような確実性に基づいて、話し手は「若ぞう」「おじさん」「課長さん」を、聞き手と認識するわけである。

つまり、ある指示対象が自身を聞き手と認識しているか否かと、その指示対象を話し手が聞き手と認識するか否かととは、別問題である。

したがって、この段階では、次の (14) が成立している。

- (14) 対話の開始時においては、聞き手には自身が聞き手であるという認識がない、と話し手は認識している。

対話の開始時における「聞き手」とは、あくまで話し手の立場から規定されるものである。

3.2 人称区分型・距離区分型の対照

人称区分型では、聞き手の領域は、ソ系の指示語によって指される。(1)(2)(3) の「若ぞう」「おじさん」「課長さん」の領域も、同じくソ系の「そこ」で指されるのであるから、(1)(2)(3) は一見すると、人称区分型のように思われる。しかし話し手と聞き手との距離が“近い”場合は、どうだろうか。

仮に、(1)(2)(3) で、「若ぞう」「おじさん」「課長さん」が、話し手のすぐ目の前にいるとしたら、「そのN」で指すことは不可能となる。すなわち、

聞き手を指す「そのN」という指示行為が成立するには、話し手と聞き手との間に一定の距離が必要なのである。

それに対して、人称区分型では、両者の距離の遠近にかかわらずに、話し手は聞き手の領域をソ系の指示語で指せる。例えば、先に見た(6)では、話し手「太郎」と聞き手「花子」との距離が非常に“近い”が、「太郎」は「花子」の領域をソ系の指示語で指せる。

以上の観察から、話し手からの距離が“近い”とソ系の指示語を使えない(1)(2)(3)は、人称区分型ではない、と判断される。

また一方、距離区分型では、聞き手は存在しない。しかし(1)(2)(3)では、「そのN」に対して応答し得る聞き手が存在する。

さらに、距離区分型ではアの領域が現れるが、(1)(2)(3)では、ア系の指示語は使えない。

- (1) “おい、*あその若ぞう」と松田はずんぐりした太い指で…
- (2) “おい、*あそのおじさんよ。あんた、今朝の八時から…”
- (3) “おい、*あその立派で、おめでたい課長さん、…”

「アで指し示される対象は、「話し手が現在働きかけられないもの・処理不能あるいは処理済みのもの・勢力を及ぼせないもの」である」(金木・田窪 1992: 187)。したがって、働きかける対象＝聞き手である「若ぞう」「おじさん」「課長さん」を指すために、ア系の指示語が利用されることは、あり得ない。

以上の観察から、聞き手が存在し、かつアの領域が現れない(1)(2)(3)は、距離区分型でもない、と判断される。

3.3 距離区分型の視点システムによって聞き手を指す

前節で確認したように、(1)(2)(3)の場面は、完全な人称区分型でも、完全な距離区分型でもない。そうではなく、両者の性質を合わせ持った特殊な場面だと考えられる。

つまり話し手は、(14)を利用して、聞き手の存在を認識しながらも、距離区分型の視点システムによって、「ソ」で聞き手を指すのである。

聞き手を指す「そのN」が、距離区分型の視点システムによることの証拠として、先に見た通り、「そのN」という指示が成立するためには、話し手と聞き手との間に一定の距離が必要である、ということが挙げられる。

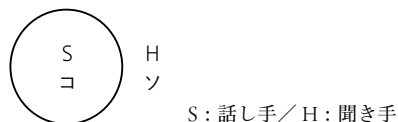
すなわち、(1)(2)(3)において、「若ぞう」「おじさん」「課長さん」が話し手のすぐ目の前にいるとしたら、「そのN」によって指すことは不可能となる。それは距離区分型の“中距離用法の性質”を持っているからに他ならない。

以上の考察から、「そのN」によって聞き手を指示する行為とは、距離区分型の視点システムによって、聞き手を指示する行為である、と言うことができる。

そのようなことが可能なのは、2節で見たように、聞き手の領域を指す形式も、中距離の領域を指す形式も、どちらも同じ「ソ」だからである。すなわち、聞き手を指す「そのN」における「ソ」は、聞き手用法・中距離用法の性質を合わせ持っている、というわけである。

このような指示行為の場面は、次のように図示される。

図3 聞き手を指す「そのN」が成立する場面



(1)(2)(3)の「そのN」における「ソ」は、まず、聞き手用法の性質を持つ。もしそうでなければ、(1)(2)(3)では相手が存在しないから、(12)の「それは何だろう」のように、座りが悪くなるはずである。しかし、(1)(2)(3)の「そのN」は、ごく自然な発話である。以上より、図3におけるソの領域は、聞き手(H)の領域であることが分かる。

しかしながら同時に、(1)(2)(3)の聞き手には、自身が聞き手であるという認識がない。聞き手は、いつどこから指されるのかを予測できない立場にあるわけであり、それはすなわち、話し手を指せる立場にない、ということを含意する。

そのことを図3においては、話し手を円内(コの領域)に、聞き手を円外(ソ

の領域)に置くことによって表している(話し手は直示の中心になり得るが、聞き手は直示の中心になり得ない)。すなわち、コとソの領域は(人称区分型とは違って)非対称的なわけである。また、先に見たように、対象は話し手から少し離れていなければならない。

これらは距離区分型の特徴と同じである。したがって、図3におけるソの領域は、中距離の領域でもある。

また、(1)(2)(3)ではア系の指示語は使われ得ないから、図3ではアの領域は現れない。

聞き手を指す「そのN」は、まさに図3の場面において成立するのだと考えられる。^[注8]

3.4 「そのN」における「ソ」の表現効果

「そのN」における「そこ」は、聞き手用法・中距離用法の性質を合わせ持つ。その結果、「N」を聞き手として認識しつつも、聞き手の領域の成立を承認しない(中距離の領域として捉える)、という特殊な指し方をすることになる。

このような指し方は、コとソの間に優劣関係を生み出す。すなわち、聞き手の領域の成立は承認されないのだから、ソの領域にいる聞き手には、コの領域にいる話し手を指示する権限が与えられない。コの領域にいる話し手のみが、ソの領域にいる聞き手を指示できる。このコとソの非対称性が、話し手を優位に、聞き手を劣位に置く。

このように、話し手が聞き手を、「そのN」によって一方的に指示する行為を、話し手が聞き手を“指示語によって支配下に置く”と言うことにする。以上の議論は、次のようにまとめられる。

- (X) 聞き手を指す「そのN」は、コとソの領域の非対称性を利用することにより、話し手が聞き手を“指示語によって支配下に置く”というニュアンスを生む。

4 「そのN」の非丁寧さ

以上、聞き手を指す「そのN」が成立する理由について、考察してきた。また、「そのN」によって聞き手を指すことが非丁寧さを生み出すことを見た。本節では、「そのN」の非丁寧さ、バリエーションについて、具体的に検討する。

4.1 明らかに非丁寧な「そのN」

まずは、全体としては丁寧な意図であっても、「そのN」によって待遇的に許容されがたい、という例を検討する。

- (15) (留学説明会の会場に、多くの学生が集まっている。その中を数名の教員が巡回している場面)

「あの、先生、奨学金について聞きたいのですが」 (作例)

- (15)' 「あの、その先生、奨学金について聞きたいのですが」

いくら「先生」の特定を容易にするためであれ、(15)'のように「そのN」を先行させることは、待遇的に許容されがたい。その理由は(X)によって説明される。下位者の「学生」が上位者の「先生」を“指示語によって支配下に置く”ことが、待遇的に問題なのである。

「そのN」の非丁寧さは、文体的な理由に起因する部分もあるが、しかしそれは程度の問題に過ぎない。

- (15)" 「あの、そちらの先生、奨学金について聞きたいのですが」

(15)'と(15)"を比べると、(15)"の方が(15)'より丁寧に感じられる。それは、「そちら」の方が「そこ」より文体的に丁寧である、ということに起因するだろう。

しかし重要なのは、文体的に丁寧な(15)"の「そちらのN」であっても、何

も先行しない(15)と比べれば、非丁寧さは否めない、ということである。これは、(X)における「そこ」を「そちら」に置き換えれば、同様に説明できる。

また、(15)の「先生」は本来的な意味での敬称であるが、次の(16)の「先生」は、いわば蔑称として使われている。

(16) 「おい、先生、ちょっとハイライト一つ買ってきてくれ」

「はッ」

先生は、ディレクターに目をつけられた喜びに胸をふくらませながら、階段を駆けつまるびつ駆け下りて行く。(風に吹かれて)

(16)' 「おい、そこの先生、ちょっとハイライト一つ買ってきてくれ」

(16)'のように「そこの」が先行することにより、「先生」の蔑称としての性格が、いっそう確実に伝わるものと考えられる。

以上、聞き手を指す「そこのN」の非丁寧さを、具体的に検討した。本節での考察を経た上であれば、(1)(2)(3)の「そこの」も、(発話全体の非丁寧さに隠れがちだが)非丁寧さの一要因となっていることが了解されるだろう。

4.2 非丁寧とは感じられない「そこのN」

前節では、明らかに非丁寧と感じられる「そこのN」を取り上げた。ところが、必ずしも非丁寧とは感じられない「そこのN」もある。

(17) (観光地で、老紳士が少女に撮影を頼む場面)

「そこのお嬢ちゃん、写真を撮ってくれるかな」 (作例)

(18) (駅のホームで、駅員が乗客に注意する場面)

「そこのお客さん、白線の内側に下がって下さい！」 (作例)

確かに(17)(18)の「そこのN」は、非丁寧とは感じられない。しかし、これらの発話も、やはり(X)と無関係ではない。

(17)においては「老紳士」が「少女」を、(18)においては「駅員」が「乗客」を、それぞれ“指示語によって支配下に置く”ことになる。

それらが待遇的に許容される（ように感じられる）のは、(17) では、年齢的に「老紳士」が「少女」より優位な立場にあるからであり、(18) では、一刻をも争う緊急事態であるから、と考えられる。

つまり聞き手を“指示語によって支配下に置く”理由があれば、その非丁寧さは表面化しにくいわけである。

したがって、以下のように役割や状況を変えると、話し手が聞き手を“指示語によって支配下に置く”理由を失ってしまうため、非丁寧さが表面化しやすくなる。

(17)' (観光地で、少女が老紳士に撮影を頼む場面)

「そこのおじちゃん、写真を撮ってください」

(18)' (電車内で、駅員が乗客に対して改札をする場面)

「そこのお客さん、切符を拝見させてください」

(17)' では、「老紳士」と「少女」の役割が (17) とは逆転するため、また (18)' では、(18) のような緊急性が存在しないため、それぞれ非丁寧さが表面化することになる。

(17)" 「おじちゃん、写真を撮ってください」

(18)" 「お客さん、切符を拝見させてください」

「そこ」が先行しない (17)" (18)" には、非丁寧さは感じられない。

以上から、「そこ」の N の非丁寧さは、ときには表面化しにくい、ということが分かる。それは、発話される場面や文脈に左右されてのことである。しかし重要なことは、どのような場面や文脈においても、(X) の原則は一貫して有効である、ということに他ならない。

4.3 「そこ」の+二人称名詞

また、「そこ」の+二人称名詞」というバリエーションもあり得る。

- (19) 「一寸、そこのあなたたち、お話聞き捨てにならないな。何んです」と、今まで二人の話を聞いていなかった筈の男爵が、そう云って矢代の方に身を傾けよせて来た。(旅愁、一部改変)
- (20) 「ねえ、その君、ちょっと持つの手伝ってよ」(作例)

「あなたたち」「君」などの二人称名詞は、聞き手を指すことを本務とする。それだけに、これらの場面では、指示対象＝聞き手であることがすぐに分かるものと思われる（それほど現場が広くない、該当しそうな指示対象が他に存在しない、など）。

- (19)' 「一寸、あなたたち、お話聞き捨てにならないな。…」
- (20)' 「ねえ、君、ちょっと持つの手伝ってよ」

(1)' (2)' (3)' において見たように、聞き手を指すにあたって、「そのの」を先行させることは必須ではない。「N」が二人称名詞である場合は、その典型的なケースと言える。

「そのの」が先行する (19) (20) は、先行しない (19)' (20)' に比べて、上からものを言っているように感じられる。その理由も、やはり (X) によって説明されるだろう。

4.4 「そのの+固有名詞」

最後に、「そのの+固有名詞」について検討する。

すでに一義的に決まっている対象を「そののN」によって指すことは難しい。それは、2節で述べたように、そもそも「そののN」という形式は、「N」の特定を容易にするための位置情報を提示するものだからである。

「N」が固有名詞である場合、指示対象は一義的に決まっているのであるから、「そのの」が先行する必然性はない。

- (21) (会社内で同僚に)
- 「?その山田さん、書類を取ってください」

(22) (子供が父親に)

「そこのお父さん、どこか行こうよ」^[注9]

確かに (21)(22) は不自然である。それは上で述べたように、対象の特定にあたって、位置情報が不要だからである。

ただし次のように、例えば聞き手を軽視するような意図があるときには、「その+固有名詞」も不自然ではなくなる。

(21)' (仕事が捗らない部下を見かねた上司が、イライラして…)

「そこの山田君、そんな仕事に何時間かかるんだね」 (作例)

(22)' (掃除をしたい妻が、部屋の真ん中に寝転がっている夫に…)

「そこのお父さん、邪魔だから、散歩でもしてきて」 (作例)

「N」が固有名詞であれば、位置情報は絶対的に不要である。しかし、「その」が先行することで、「N」だけでは聞き手を特定することが難しい、というニュアンスが生まれる。

それは「N」の“固有性”を軽視することを含意する。したがって、聞き手を軽視する意図のない (21)(22) は不自然に感じられるのに対し、そのような意図のある (21)' (22)' は自然なのである。

「その+固有名詞 (準じる名詞)」においては、(X) に起因する非丁寧さに、聞き手の“固有性”の軽視というニュアンスが加わるものと考えられる。^[注10]

5 おわりに

本稿では、聞き手を指す「そのN」について、非丁寧さという観点から論じた。なぜ聞き手を指す「そのN」は非丁寧になるのか。この問題に対して、対話の開始時におけるコトソの非対称性から (X) の原則を導き出し、詳細な検討を行った。

(X) 聞き手を指す「そのN」は、コトソの領域の非対称性を利用するこ

とにより、話し手が聞き手を“指示語によって支配下に置く”というニュアンスを生む。

(X)の背後には、対話の開始時における「ソ」が、聞き手用法・中距離用法の性質を合わせ持っている、という事実が存在する。このことは、Fillmore (1982)が指摘する〔注7〕のように「ソ」は2つの異なる性質を持つわけだが、対話の開始時において、この両性質は未分化である、ということを含意する。それが現象として顕在化するのが、本稿で論じた聞き手を指す「そのN」における「ソ」に他ならない。

この両性質が未分化である状態を、本稿では、図3によって示した。現場指示の「ソ」の上位の性質は、“話し手が現在アクセスできる非コの領域を指す”というものであろう。そして、聞き手用法・中距離用法という2つの性質は、その下位の性質に相当する。

“非コの領域”の性質が具体的に決まるには、話し手の主観のみでは不十分であって、話し手以外の参加者の存在を必要とする。

つまり、(1)(2)(3)の場面は、指示対象からの何らかの応答があって、初めて人称区分型に移行するのであり、それ以後に使用される「ソ」は(5)(6)と同様、聞き手用法となる。

また、(9)(10)では、そもそも指示対象からの応答を想定していない(できない)わけだが、これらの場面においては相手が存在するので、使用される「ソ」は自然な中距離用法として成立する。

以上から、聞き手も相手も存在しない(12)の座りの悪さを、説明することができる。それは、“非コの領域”の具体的な性質が決まらないからである。

(1)(2)(3)では、話し手の主観において、対象を聞き手と捉えることによって、例外的に「そのN」という指示が成立する。しかしながら、このような「ソ」が、聞き手用法のみならず、中距離用法の性質も持ち合わせることは、本稿で詳細に論じてきたところである。

ソ系の指示語の聞き手用法・中距離用法を統一的に説明することは、指示語研究に残る課題の1つである。本稿は、その課題に答えることを試みた論としても位置づけられる。

〈埼玉大学〉

注

- [注1] …… 本稿では「具体的な相手に対する話手の積極的な意志の発動をもっぱら表現する形式」(尾上 1975: 70)を“呼びかけ”と定義する。なお、「N」(名詞)と「NP」(名詞句)を合わせて、「N」と表記する。
- [注2] …… ただし、そもそも単独では呼びかけとして使えない「N」がある。
- (i)『その者／*者、なにをしてる、…』(カヌーで来た男)
- (ii)「こら、その二人／*二人、…」(湿原)
- これらの「N」がどのような性質を持つのかを考察することも興味深いが、本稿の目的には沿わないので、これらは考察対象から外す。なお、(ii)の「指示語＋数量詞」の問題については、岩田(2006)で論じられているので、参照されたい。
- [注3] …… 指示者が存在する位置(焦点)は、「直示の中心」(deictic center)と呼ばれる。
- if ... we think of deictic expressions as anchored to specific points in the communicative event, then the unmarked anchorage points, constituting the deictic centre, ...
- (Levinson 1983: 63–64)
- [注4] …… 「“中距離”という領域は近距離、遠距離が確定した後¹に寄生的に成立する領域」(金水 1999: 86)である。本稿では、近距離・遠距離の領域は、話し手の主観のみによって決まるが、中距離の領域が決まるには、話し手以外の参加者の存在を必要とする、と考える。
- [注5] …… この場合の「相手」は、話し手と領域を区分しているわけではないので、「聞き手」とは捉えない。すなわち本稿では、人称区分型における「聞き手」と、距離区分型における「相手」を、峻別して考察する。
- [注6] …… 筆者は日本語教育に従事するが、筆者の経験から言うと「ソ系の場合のみ相手がいないと座りが悪い」ということを理解している学習者は、上級クラスにおいても少ない。このことは日本語教育において、もっと意識的に提示してもよいのではないかと思われる。ちなみに、この場合には「融合型」という概念の方が有効だろう。
- [注7] …… Fillmore (1982) は、諸言語の指示語体系を通覧し、3系列の指示語体系([Proximal]: [Medial]: [Distal])について、次のように言及している([Medial]はソ系に相当する)。
- The Medial category in a three-steps system has ‘short distance from Speaker’ and ‘close to Hearer’ as the two elements of its semantic prototype. (Fillmore 1982: 55)
- [注8] …… 金井(2007)においては、聞き手を指す「そこ」(そこ、うるさいよ)を用いて、本稿とは別のルート(「そこ」から聞き手へのメトニミーが成立するか否か)から図3を導き出しているので参照されたい。異なる2つのルートから同一の結論に到達できることは、図3の論理的必然性を保証するだろう。
- [注9] …… 話し手にとって指示対象が絶対的に定まっている(22)の「お父さん」のような「N」を、ここでは固有名詞に準じるものとして扱う。
- [注10] …… 指示対象についての位置情報が不要であればあるほど、非丁寧さは増してい

く。それはこのような指示がFillmore（1982）の言うinforming functionの性質を帯びていくから、という説明も可能である。

In the informing function, the Speaker is letting the Hearer know that a particular Figure is to be found in a particular Place. (Fillmore 1982: 43)

つまり、informing functionの性質が増せば増すほど、その指示行為は“呼びかけ”という対人的な機能を失っていく。そのような「そのの+固有名詞」で聞き手に呼びかけることは当然、非丁寧であり得る。

参考文献

- 庵功雄（2001）『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
岩田一成（2006）「日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語」『日本語文法』6(1), pp.38–55. 日本語文法学会
尾上圭介（1975）「呼びかけの実現一言表の対他的意志の分類」『国語と国文学』53(12), pp.68–80. 至文堂
金井勇人（2007）「聞き手を指す「そちら」と「そこ」について」『日本語教育』134, pp.110–119. 日本語教育学会
金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』7, pp.67–91. 言語処理学会
金水敏・田窪行則（編）（1992）『指示詞』ひつじ書房
正保勇（1981）「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』pp.51–122. 国立国語研究所
三上章（1955）『現代語法新説』刀江書院
Fillmore, C. J. (1982) Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis. In R. J. Jarvella & W. Klein (Eds.) *Speech, Place, and Action: Studies of Deixis and Related Topics* (pp.31–59). Chichester: John Wiley & Sons Ltd.
Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge [Cambridgeshire]: Cambridge University Press.

引用資料

- 井上ひさし『下駄の上の卵』
五木寛之『風に吹かれて』
加賀乙彦『湿原』
筒井康隆『エディプスの恋人』
野田知佑・片岡義男『カヌーで来た男』
三浦綾子『塩狩峠』
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』
山本周五郎『さぶ』
横光利一『旅愁』…以上、新潮社
源氏鶏太『停年退職』河出書房
毎日新聞（1999年版CD-ROM）（日外アソシエーツ）